

1

膵臓にはどんな病気がありますか？

膵臓は、食べ物を消化する酵素や、血糖値を調節するインスリンなどをつくる重要な臓器です。膵臓の病気には、急性膵炎や慢性膵炎、膵のう胞、膵がんなどがあります。急性膵炎では激しい腹痛や背部痛を伴うことが多い一方、膵がんは早期には自覚症状が乏しく、発見が難しい病気として知られています。膵臓の病気の診断や病状の評価には、血液検査や画像検査が重要な役割を果たします。

検査のはなし vol.15

専門医が教える 検査の豆知識…18

「膵臓の検査」

日本臨床検査専門医会 出居 真由美

2

血液検査でわかること

膵臓の状態を調べる代表的な血液検査項目として、「アミラーゼ」と「リパーゼ」があります。これらは膵臓から分泌される消化酵素で、膵炎などでは血液中の値が高くなります。アミラーゼは主に膵臓と唾液腺で分泌され、膵臓の病気では膵臓由来のアミラーゼが増加します。急性膵炎の診断には膵型アミラーゼや、膵臓に特異性の高いリパーゼが役立ちますが、これらの値だけで重症度を判定することはできません。その他、特殊な膵炎である自己免疫性膵炎では血液中のIgG4が診断の手掛かりとなります。

膵がんが疑われる場合には、CA19-9などの腫瘍マーカーを測定しますが、早期の膵がんでは正常なことも多く、腫瘍マーカーだけで膵がんを診断することはできません。そのため、画像検査などと組み合わせて総合的に判断します。

3

画像検査でわかること

膵臓を詳しく調べるためには画像検査が欠かせません。膵臓の画像検査として広く用いられるのが腹部超音波検査です。体への負担が少なく、健康診断でも行われますが、膵臓は胃や腸の奥にあるため、腸内のガスなどの影響で十分に観察できないことがあります。

より詳しく調べる場合には、CT検査やMRI検査などが行われます。CT検査では膵臓の形や炎症、腫瘍の有無などを確認します。MRI検査では膵管や胆管の状態をより鮮明に観察できます。また、小さな病変が疑われる場合には、内視鏡の先端に超音波装置を付けた超音波内視鏡（EUS）が用いられることもあります。EUSは数ミリ程度の小さな病変を見つけるのに優れており、必要に応じて組織を採取する検査が行われることもあります。

膵臓の病気は、血液検査と画像検査を組み合わせることで、より正確な診断につながります。膵臓は、病気が進行するまで症状が現れにくいことがあります。腹痛や背部痛、体重減少など気になる症状がある場合は、早めに医療機関を受診しましょう。



腹部超音波検査



CT検査



MRI検査



超音波内視鏡検査 (EUS)